しなやかな闘い

写真は 2008 年に樹心社から刊行された元国立市長・上原公子さん感動の書。表紙カバー小森陽一東京大教授・「九条の会」事務局長の言葉から。人は、人と人との間でしか、「人間」にはなれない。他者と共同し、共働し、協同し、協働してこそ、「人間」として生きていける。本書は、市民的キョウドウ家・上原公子という「人間」を、まるごと私たちに伝えてくれる。

「生命あふれるまちづくりの試み」という副題の本書は、目次からも幅広い上原公子さんの活動、人間味を感じさせる。第 1 章 憲法記念日に生まれた私、2 夢の広がるまち、3 非戦の国、非戦のまち、4 暮らしの場としての都市づくり―国立市のまちづくり運動の実践から、5 老いても障害があっても共に生きるまち―国立市のコミュニティづくり、6 市長室へようこそ、7 市民が主役の市民自治を、8 くにたちのもうひとつの宝―滝乃川学園本館と聖三一礼拝堂、そして天使のピアノ

「あとがき」からも、上原さんの思いが伝わってくる。

―この本は、これまで書いてきたものと講演記録の寄せ集めです。私の言いたいことが必ずしも全て網羅されてはいませんが、何を考えながら運動し、市長という仕事をしてきたか、ほんの少しは見えるのではと思っています。

主婦から市長にと、一見飛躍した人生のように見えますが、一人の市民として運動し始めてから、ずっとがむしゃらに走り続けられたのは、「やりたいことが次々に出てきたから」に過ぎないのです。そして、気がつけばある意味では、地方自治にこだわり、市民自治を模索した活動の当然の結果として市長という仕事をさせていただいていたのだと思います。

本来、地方自治、市民自治の市長の選び方は、そうあるべきであると思っています。これまでの古いまちの政治のように、利権代表者がまちを仕切るのではなく、市民と一緒にまちを作る人を、市民の代表として皆で市長として送り込む。だから、市長にお任せ、市役所にお任せでなく、市民もまちづくりに関わっていくし、行政はそのステージ作りをしながら、合意したものをルール化していくのです。これこそ、市民自治であり、試行錯誤で、共に民主主義社会の実現を目指すのが自治の本旨でしょう。まるで、地方自治の解説書のようですが、国立市民は、上原市長選から確実にそれを目指して 8 年間共にがんばってきました。その意味で、国立の上原市政の 8 年間は市民自治の実験であり、そのお手本になる試みだったと思います。

10 月 20 日、上原さんが名古屋で講演する前に、1 時間余りインタビューさせてもらった。上原さんのあつい言葉を必死にメモにとった。あっという間に時間が過ぎたが、とにかく「元気」をもらうことができた。本書をじっくり読んで、その思いを強くした。

（2017 年 11 月 2 日）